病院経営を可視化!

セコムが提案する EBM

エビデンス・ベースト・マネジメント

第3回 聖マリアンナ医科大学病院（川崎市宮前区）

地域を支える大学病院の医療の現状をリアルタイムで捕捉・提示する

聖マリアンナ医科大学病院
根津保廣 病院事務統括担当執行役事務部部長
鈴木和明 病院経営管理室主事
川瀬弘一 小児外科病院教授・病院経営管理室室長
原 大地 病院経営管理室担当
【聞き手】関塚永一 セコム医療システム株式会社顧問

聖マリアンナ医科大学病院は特定機能病院として高度先進医療を提供することはもちろん、地域医療の要役としての機能も果たしている。セコム医療システム株式会社の「セコムSMASH」は、そんな同院の取り組みを可視化するツールとして重宝されている。新型コロナウイルス感染症が蔓延するなかでもその威力は発揮されたという。

セコムSMASH採用の経緯

――セコムSMASHをお使いになっていただくようになった経緯はいかがでしょうか。

川瀬 DPC制度が始まった当初からDPCコーディングができるシステムの開発を進めてきましたが、これまではいろいろベンダーを変えてきました。以前のシステムもそれなりに使いやすく、他の大きな病院にも入っていましたが、実際に使っているとやはり大学病院とは違う患者の構成を想定しているなど、データ活用に課題がありました。そのような時にセコムSMASHのお話を聞いたのです。月単位どころか月の途中でもデータを更新でき、提示されるデータも、とてもわかりやすく内容を理解しやすいグラフに仕上がっていました。これは使いやすいということで、変更したのです。

根津 以前のシステムは電算機室の一部の職員だけしか使いこなせませんでしたが、セコムSMASHは説明会で感覚的に使いやすく、うちの医事課職員でもすぐ溶け込むようなシステムだったので、「これはいいな」と思いました。

コロナ禍の影響も診療科疾患ごとに可視化

――医師や看護師長にはどんなデータを出しているのでしょうか。

川瀬 7対1体制を維持するために、特定機能病院入院基本料や急性期一般病棟入院料1の重症患者割合を維持しなければなりませんが、セコムSMASHでは病棟ごとでも1クリックでリアルタイムの状況がわかります。現在、病院での活用に向けて準備を進めているところです。

根津 コロナ禍での分析も進めています。小児医療は医療費が無料の地域が多いので、DPCデータでなくセコムSMASHで調べたのですが、そうすると去年に比べて、肺炎をはじめ感染症関係が激減していました。去年と今年の違いが歴然と現れたデータを小児科の先生にお示しできました。ちょうど医事課にお願いしているのですが、例年、呼吸器内科はこの時期になると患者さんが増えるのですが、今年は肺炎の患者さんが減っており、それを今セコムSMASHで調べています。DPC以外でも出来高算定の疾患でも全部出せますし、一年の傾向はもちろん、経年的な変化も追えます。おそらく感染症関係のものが激減しているでしょう。がん患者さんは今までと変わらずそのまま来られるという状態です。

左から原大地・病院経営管理室担当、関塚永一・セコム医療システム顧問、川瀬弘一・小児外科病院教授・病院経営管理室室長、根津保廣・病院事務統括担当執行役事務部部長、鈴木和明・病院経営管理室主事

現場へのフィードバック改善もスムーズ

――経営管理室から見て、どんなメリットがありましたか。

原 セコムSMASHが導入されて真っ先にアクションを起こしてくれたのが医事課です。現場の先生方からはどんなデータ分析が求められているのか教えてほしいという要望を出してくれました。セコムSMASHの保存機能も、一回データを作って保存しておくと毎月同じように出せるので重宝しています。

鈴木 それから、資料づくりが本当に簡単になりました。7年ぐらい前だと患者数や稼働状況など基本的な指標だけで説明できたのですが今はそれ以上のことが求められます。それでポジショニングという機能があると思うのですが、そこを今までは厚生労働省の公表データをダウンロードして手作業で集計してやっていたので本当に助かります。

原 根津部長から以前、加算の推移をベンチマークで見たいと言われて資料を作成したのですが、そのなかで当院は外来迅速検体加算の算定がかなり低い状況が明らかになったことがありました。根津部長からすぐに現場へフィードバックしていただいたところ、算定漏れがほぼゼロになるという成果が出ました。

分院とのベンチマークも進め、多角的に分析

川瀬 大学病院本院だけセコムSMASHを使っていても比較しにくいので、根津部長に呼びかけてもらって、分院も全部セコムSMASHに変えてもらいました。説明する時にも皆さんが理解して、「これならばいいよ」と言ってくださいました。あと私自身がやりたいことは大学病院本院のベンチマークはやっぱり他の大学と比べたいです。分院はちょうど500床ぐらいの地域中核病院と比べてもいいのかもしれませんが、それでも大学附属の分院はかなり特殊であり、大学の分院と比べたいと思っています。今回のコロナ禍でも、患者さんの戻りを検討したい場合、他院との比較は重要です。そういうところでも他の病院も同じことを考えているでしょう。まず試行し、良ければグループ化させてもらうというふうに進めれば、利用頻度も上がり、使い勝手も良くなると思います。

――ベンチマークで回復が早いところがあれば、何が要因で元に戻ったかも明確化できますね。本日はありがとうございました。

聖マリアンナ医科大学病院

所在地：川崎市宮前区菅生2-16-1
病床数：1175床（GHCU8床、MFICU6床、NICU12床、GCU24床、7対1病床1123床）
職員数：常勤医612人、常勤看護師1035人
※2018年度病床機能報告より

1974年に開院。特定機能病院としての役割を果たす一方、地域の中核病院として機能を十分に発揮できるよう32診療科を揃えている。また多くのセンターや診療協力部門を設置し各診療科間の連携体制構築にも力を入れている。

※月刊『フェイズ・スリー』2021年7月号に掲載された記事を、株式会社日本医療企画の許可を得て加工したものをお送りしております。